

R Cと、一月中通算七回となる。このようなことは始めてであるが、見聞を拡め得たことは事実であり、“貯勤”も殖えた事に相成り、気も楽になったような思いである。

私は、この二月末で、ロータリー入会満二九年、皆出席も二九年になる筈であるが、私が始めて金沢 R C に入会の当時は、県内には金沢 R C だけしかなく、メイク・アップは県外に求めねばならず苦勞もあつたが、今は金沢市内だけでも五 R C、県内二四 R C、全く今昔の感に堪えない。これも健康に恵まれた賜ものでもあるが、心掛けと努力次第であり、“貯勤”制度のお陰であつた。クラブの出席率の高まるのはクラブだけのためではなく、ロータリーアン個々のためである。出席競争が嵩じた結果の笑えぬ悲話がある。或るクラブが一〇〇%を続けよう……と必死になっている矢先、一人の会員が病氣になつた。クラブではその人を病院からタンカに乗せて例会場に運んだ……。と言う話もあるが、こんなのはロータリーの悲劇であり、思いやりを忘却した苛酷なる暴挙と言わねばならない。

何かの参考に……と、事務局の萩原さんに調べてもらったところによると、昭和五十六年十二月末現在で、金沢五 R C における十カ年以上の皆出席者数は、金沢 R C ……二一名、金沢東 R C ……二六名、金沢西 R C ……三〇名、金沢南 R C ……二七名、金沢北 R C ……二名など、計一一六名である。金沢北 R C は創立十年に満たないので少ないのは当然であるが、創立は最も早く、メンバーも一番多い総本家の金沢 R C が他の後進に較べて最も

少くないのは意外である。また皆出席の人々の顔触れを見ると、比較的多忙な毎日を送っている人々に多いのも考えさせられるものがある。

また、二〇カ年以上の人々は次の十九名である。

- ◇二〇年 沢田由太郎(東)、村上甚太郎(東)、成瀬栄蔵(南)
- ◇二一年 坪野俊雄(金)、内田一(金)、別川七造(東)
- ◇二二年 寿美田与作(金)、鈴木菊男(東)、山上嘉久(東)、福光博(東)、高桑治(東)
- ◇二三年 高橋介州(東)、田中嘉太郎(西)、小堀甚九郎(西)
- ◇二五年 石黒伝六(金)
- ◇二六年 新名健吉(東)、松川藤右工門(東)
- ◇二八年 真柄要助(金)、柴田三郎(北)

金沢 R C で二二年の寿美田さんと、二一年の内田さんの入会時、私とその推薦者の一人であるが、内田さんのように多くの患者さんを抱えている医師の立場で、この長期皆出席には大変なご苦勞があつたらうに……と、敬意を表して止まないが、まさに“成せばなる”の哲学である。

(金沢北 R C 会報 No. 二〇九 昭和五十七年二月四日)

大場さんの偉業を讃えて

「人間国宝……重要無形文化財保持者」は、芸術家として最大の榮譽であり、最高の技芸を保持することの国家的認定である。このたび、われらの大場松魚さんが、その輝かしい印綬をうけられたのは、この上なき慶びであり、深く敬意を表して止まない。

世の芸術家と称せられる人々の中には、その実力よりも、政治力の先行するのがあると言われるが、大場さんは、いとも謙虚で人格は豊かで、非凡なる才能を身につけながら、なお、たゆみなき精進を重ねつつ、あたかも名技「平文」の如き鋭い感覚が、穏やかに秘められていて、端正なる丹頂鶴を思わせる。論語の一節に「人はたえず自らを戒めて上達せよ」とあり、『温、良、恭、儉、讓』を訓えている。まさに大場さんである。

大場さんは、名工で御尊父の故、和吉郎さんに漆芸の手ほどきを。そして賢母（はついさん、八十三歳で御健在）と、良妻（外茂栄さん、五十五年十一月逝去）の物心の大きな支え、そして、素晴らしい師に恵まれて、道ひとすじに打ち込んだのであろう。

大場さん宅の客室には、芸術院会員、人間国宝で漆芸の最高峰、松田権六先生から贈られた書状が、人生訓として表装されて床の間に掲げられている。かつて大場さんが第四回日展出品の「漆之宝石箱」が特選を受賞の昭和二十三年十月のときのものである。この師にして、この弟ありの感を禁じ得ない。

松田権六先生の書状の内容

威張らぬこと。益々精進すること。不出品者に対しては特に言動に注意すること。

政治的な策動からラチ外のこと。不言実行を本尊とされたし。愈々大和精神の根源をつき生ける現代の作品を如何に表現すべきかに邁進されることを望む。

（金沢北R.C 会報No.二二三号 昭和五七年四月八日）

鞭聲肅々夜河を渡る

館ガバナーの公式訪問を終って

砺波RCの創立は昭和三〇年九月で、多士濟々、まさに名門クラブの名に恥ぬ存在である。そのメンバーには、香り高き文化人、神沢重治氏（元、銀行経営）があり、その名著を、私は幾たびか頂く光栄に浴している。

ロータリーを深く極めた菅野宜紀氏（歯科医）は、私が、ロータリーに最も情熱を燃やした頃の、ロータリーの良き戦友の一人であった。もう一人、筋金入りの実業人（砺波交通経営）としての館金吾氏の令名は、久しく存じてはいたが、直接の面識はなかったようである。ところが、地区ガバナーへの登場を知ったとき、私は一種の驚きを感じつつ、かねて待望の異色(?)なるガバナーの出現に、深い関心と期待を寄せたのであった。

「友」七月号は恒例によって全国の地区、新ガバナーのプロフィールを紹介したが、われらの新ガバナー館金吾氏に対する推薦の辞は、同門の神沢重治氏によって「ガバナーとい

うと、都大路を興でゆく大宮人を連想するが、館氏は、そういう優雅な貴人型ではなく、黒おどしの鎧に長太刀を佩いた鎌倉武士に似た風格の人である」と、館氏の生い立ち、経営人としての輝かしい実績、その人生行路、日常生活など、さすが流麗なる名筆をもって簡にして明なる表現をされたのであった。

かくして、そのタイトル「鞭聲肅々夜河を渡る」は、まさに、館ガバナーの風格ある進軍振りが遺憾なく偲ばれるものであった。

さて、五七年十月二八日、われらが、館ガバナーを迎える、いわゆる公式訪問の例会である。掲示板には「ガバナー館金吾君」と紹介されてある。とっさに私は、君を殿に書き改めては……と、担当にアドバイスして書き直したところ、いつの間にか二転また君になつて仕舞つた。館ガバナーは殿を君に直せと、注文をつけられたので……と、幹事は私にささやいた。君は、ロータリーの慣例ではあるが、私は日常、君を使ったことはない。言い辛いからであり、なじめないからである。かねて君呼びに抵抗を感じていた私は、われらの指導者に対する殿は当然の敬称であると直感したからであった。しかし、館ガバナーは真実、謙虚なる苦勞人だけに、虚名を排したのであろう。もうひとつ、この野人ガバナーは、公式訪問の「公式」に内心、抵抗を感じておられるようであった。さすが実戦の経営人であるなアと、私は感じ入った次第である。公式と言うから、訪問する人も、受

けるものも、袴（かみしも）調になって、ガバナー用のデーターが作られたりするのだ。

ロータリーには、一事が万幸、実を忘れた形式が余りにもはびこって、日本のロータリーに影をおとしているのであって、私には、痛恨久しいのである。

定刻、例会場に臨まれて一旦着席された館ガバナーは、フト立ちあがって、つかつかと離れていた私の席に来られ、膝を折って挨拶されたのである。さすがの私も面喰らって、恐縮を禁じ得なかった……一会員の私ごときに、しかも多くの目のある中を改めて……と。気取らず、こだわらぬ豪快なる館さんに潜む、限りなき繊細なる言動、豊かなる人情味は神沢さんの表現をかりるならば、*「鉄火肌の宿将」*の内面に深く活きづく、おおらかなる人柄である。私は、この館さんに、時の人、偉大なる土光敏夫大人を、フト感じて止まなかつた。

ガバナーを囲んで始まったクラブ協議会では、いよいよ、館ガバナーの本領が発揮され、真実ある多くの訓え、アドバイスが展開されて、深い感銘と印象、すがすがしい余韻が、いつまでも馥郁と残るのであった。なんと、威張らないガバナーであることよ……。

会長、幹事との懇談……例会講演……クラブ協議会と相次ぐ館ガバナーの貴重なる一連の語録の要点を想起すれば（文責筆者）。

A クラブ要覧「集いて図る心はひとつ」は、わが金沢北RCの顔であり、虚飾なき決算報告であり、意欲まんまん、次期への予算案であり、われらの最も心血を傾けているもののひとつである。が、クラブ創立は十年に満たず、まだまだ万全に程遠く未熟である。しかるに館ガバナーは、クラブの意欲を認められ、温い論評を与えてくださったのである。

B 会報発行は、クラブによって、月一回、隔週、毎週とあるが、当クラブは創立以来の方針を堅持して隔週刊行となっているが、館ガバナーは、その内容、構成ともに、適切なりとの評価であった。

C 当クラブの委員会構成は、全国的に特異なるものであり、創立以来、極めて合理的、機動的に成果をあげつつあるが、かつては、白眼視される向きもあった。しかるに、館ガバナーは率直に評価され、特に「修練委員会（他クラブのロータリー情報委員会）」の名称、目的に対し好評を下され、特に「修練」とは、なんと心憎い……とまで述べられた。

D ロータリーから、修練をはずせば単なる親睦団体となって仕舞うのである。ロータリーは人を作るところである。従って、ロータリーの例会は、「修練の道場であり、良き友を作る親睦のグラウンドである」と、私どもは定義している所以であるが、館ガバ

ナーは、これに対し深く共感を示されつつも、「ロータリーは生涯教育の場」と、自ら提唱された。まさに、深く共鳴を禁じ得ない雄大な名言である。

E 当クラブの親睦委員会の支出が、他の経費に比較して、極めて僅少である……と指摘された。さすが経営の達人である。当クラブでは、その性質上、受益者負担の建て前を採っていることを説明し、諒解されたが、一事が万事、その着眼点の鋭さには敬服を禁じ得ない。

F 当クラブ独自の委員会のひとつに「地域開発」があつて、地元町会連合会などと緊密なる接触を保ち、積極的に地域の整備、発展に協力し、多くの成果をあげつつある。また、テリトリーの市民に向けて「オアシス」運動を展開し呼びかけている。更に、来たるクラブ創立十周年記念事業の目玉として、歴史的文化財、伝統工業などを網羅した仮称「金沢北郷土誌」の出版を早くから計画し進行しているのであるが、これら地域奉仕の快挙に対し、館ガバナーは深い共感と激励が述べられた。

G インターアクト、ロータリーアクトの結成については、歴代ガバナーに指摘されている宿題であるが「生み出し」の実情に鑑み、慎重を続けている当クラブの方針に対し、館ガバナーは、含みある理解を示された。

H 当クラブのテリトリー内に石川県武道館がある。館ガバナーは、これを活用し小・中

学生を対象に、剣道、柔道の大会を主催し、青少年対策のひとつにしては如何か……と、強調され、帰途、わざわざ武道館を視察された。その熱意とご見識はさすがである。クラブでは、その後、早速、その意に副って始動が開始されているのであつて、わがクラブの行動力は、まさに、これである。実現の暁には必ずや、館さんを来賓に迎え、欣んでもらえる事になるであらう。

I 当クラブ編集の、ロータリー文献「お、ロータリー……職業奉仕とは」九、〇〇〇部および「お、ロータリー……ロータリーとは」五、〇〇〇部と、相次ぐ出版は少なからぬ出費と苦勞の積み重ねであつたが、当地区はもちろん、全国津々浦々のRCの人々多数に愛読、絶賛され、いわゆる洛陽の誌価を高め、広域奉仕となった。館ガバナーは、この快挙を採り上げて賛辞を贈ってくださった。「意義ある業績賞」に充分価するものである……との賞賛の声は当時、他の地区から多く聞えて来たが、当地区の機関には遂に黙視されて終った。ロータリーの思いやりを、強く痛感した次第。

J 金沢北RCのテリトリーは、面積も広大、人口も多いらしいので、もっと積極的に会員をふやしては如何……と、館ガバナーは注文をつけられた。「農業地域が多く、農業人口で占められ、職種にも限界があるので……」と、私は補足説明しようと思つた途端、館ガバナーは、「会員増強を慫慂する本旨は、ロータリーを殖やすことによつ

て、ロータリー精神の地域、拡大を期するためであって、単にクラブを大きくする虚栄ではない……」と、明快なる解釈を下されたので、かねて、ロータリーのインフレを案じつつ「最少の会員、最大の奉仕」をモットーにクラブの内容充実を意図して来た私ども、二の句がつけなかった。しかし、クラブ運営に適正会員数があつて、クラブが過大になれば「分蜂」という、ロータリーの栄光があることを想起しなければならぬまい。わがクラブでは、その後、努力を重ねた結果、館ガバナリーの期待に副つて、近々、数名の新会員の誕生がある旨、この程、会長から中間報告があつた。まさに快

K 豪快なる館ガバナリーが、ただひとつ些細な字句について指摘された一事があつた。当クラブの要覧「集いて図る心はひとつ」の中に、「新入会員」という字句が随所に登場するのである。

そのように統一されているからである。館ガバナリーは「新入会員とあるのを新会員と改めていいのではないか」と、指摘された。この時、当クラブ修練委員長の沢田哲夫さんが発言し「当クラブでは新入会員で統一していますので、特に改める考えはありません」と、即座に明快に答弁された。私は、仲をとれもつ思いで「沢田さんは、かつての金沢地方裁判所々長で、字句については厳しいので……」と、助言すると、館

ガバナリーは諒承(?)OKの意志表示をなされたようである。

ところが、こんどは沢田さん、間髪を入れず「ご指摘はごもつとも、今後は新会員に統一し改めることに致します」と、発言があつて展開、和やかに一件落着の名判決となった。些細な字句の問題のようではあるが、心の行き交う重大事であつた……と、私は、この両雄の言動に頭のさがる思いを禁じ得なかつた。館さんと沢田さんは同輩の筈である。華麗なる枯淡の美とは、この事であろうか。

L 協議会の席に居並らぶ、われらのメンバーの中から、浅田豊久さんを発見された館ガバナリーは「松任市における「IGF」でのあなたの所論発表は、大変立派なものであつた、忘れられません」と、あつた。豊久さんは、われらのホープであり、日本青年会議所の英智を代表する一人である。彼は内心、館ガバナリーの慧眼に敬意を表し、自己研鑽と、館さんへの親近感を深めたことであろう。こうした事は、ガバナリー公式訪問の貴重なる意義を高め、われらのガバナリーの絆を強める、大きな収穫ではなからうか。

M 館ガバナリーは、結びの挨拶の中で、今年度の国際ロータリー会長は、久しぶり登場の日本人、向笠広次氏である。最善の協力を切望する。また、こんどの国際大会には、精々参加し、われらの会長を声援されんことを。また、今後積極的に「世界社会奉仕」

に努められん事を希う。と強調された。

N 協議会を終つての、お帰りぎわ、館さんは、「私は巨人の江川投手に好感を持ってぬ」と飾らぬ率直な感想を述べられた。私は思う、思いやりを忘れた思いあがつた言動は、まさにロータリーの発想ではなく、カラぶり三振である……と。しかし、これは明治生まれの感傷であろうか。私は久しく巨人びいきの一人であったのだが、江川事件以来……。ところが、若さを代表の一人昭和生まれの大村精二副会長（クラブ十周年の会長）は、われらと同感の、江川選手に対する強烈なる批判者であることを、近頃の会談で知った次第であるが、老若を問わず真理は常に一つなのである。

特定のガバナーについて、論評を書くのは、利巧なる人のすることでないらしい。大変危険が伴うからである。ロータリーには、そんなわびしい一面が頑固に存在する。されど、面従腹背となつたらロータリーの悲劇である。ところが、館ガバナーについては「雄気、堂々、誠実、謙虚で細心果敢なる大將軍」との声が相次いで私の耳に入つて来るのである。

この稿は、その後、大村副会長（会長、幹事懇談会列席）と、館ガバナーの印象について語り合つた時の話題に拠るものであつて、大村副会長と私の共感による共同作である。

（金沢北RC 会報No.二二九 昭和五七年十二月二日）

新生、中国を歴訪して

日中友好金沢市各界訪中団が結成され、時の金沢市長、岡良一氏を団長に、一行二〇名は昭和五二年一月六日、大阪空港を出発、一月二二日大阪空港帰着の十六日間にわたり、上海、蘇州、南京、揚州、北京などの都市を歴訪。各界各層の人々と日中の友好を語らい、大きな成果を挙げることが出来た。私は、副団長として一行に随伴の光栄に浴し、欲張つて、見聞を拓める努力を重ねつつ、楽しく実りある友好親善の使命を果し得た心算である。

私は、かねて訪中の機会を願望していた。それは、一日本人として抱く中国への思慕のよくなものである。中国は日本の先祖の国のようにでもあり、師の国と言うべきであろう。同人種、同文字で、宗教、文化芸術、産業、生活慣習など。そして日本の長い歴史の中に国民感情の中に、今も脈々と生き続けている東洋倫理、道徳の発祥の国であるからである。

十数カ年にわたる一連の日中事変によって、中国のこうむった被害は、人命に、物心に筆舌に尽くせぬ膨大なものがあつたはずである。しかるに、ひとたび終戦となるや、中国は無条件に即時、日本人の帰還を許し、かつ援助したばかりでなく、天文学的数字になるであろう日本国に対する、賠償権のすべてを無条件放棄したではありませんか、こんな寛大無比なる国は世界史上どこにあるうか。

私は、こんどの訪中十六日間、日本国の誇りと、謝意を胸いっぱいに行動したつもりである。

至るところ訪問先では「熱烈歓迎」の立て看板があり、冒頭の挨拶であつた。北京郊外にある「双橋人民公社」を訪れたとき、その副主任、宋さんは温顔をたたえて私ども一行を迎え、通訳を通じて公社の現況を説明されたが、会談が熱をおびたとき突然、明快な日本語で「日本の皆さんと、私ども中国は大事な友達です……」と言つた。私は思わず手をさしのべて、この大人と二度目の固い握手をかわした。かくして、私どもが帰途のバスに乗り込むと、宋さんは両手を高く挙げて「皆さん、さよなら、また来てください!!」と絶叫した。私の胸には熱いものがこみあげてきた。そして、この親日家の顔が、今も私のまぶたを去来して止まない。

「中国国際貿易促進委員会」を表敬訪問したとき私は「日本には古来、表日本、裏日本

という表現もありますが、貴国に対しては、私どもの金沢市は、一衣帯水、表日本の中心で……」と述べたところ、ここの王副主任は目を輝かしつつ、もう一度、私の手を力強く握り返してきた。

わが訪中団は最後の日程を、故、毛主席の記念堂に花環をささげて敬意を表したが、この十六日間、強行スケジュールによって、最大限なる見聞を広め、友好親善へ全力を傾倒した。

かくして、岡良一市長を団長とする一行は、つつがなく使命を果たし、十二月二二日の未明、旅舎「友誼賓館」をあとにバスは一路、空港に向かった。

やがて大陸は夜明けを告げ、東の空は雄大に紅く染め初めた。「ああ、これが東方紅だ……」と、私は新生中国のたくましい夜明けと、躍進を祝福し、あわせて日中平和条約の一日も早き締結を願望し、一方、金沢商工会議所を中心に「石川県経済友好訪中団」の早々なるスタートを期待し念じつつ、中国民航機に、帰国への身をゆだねたのであつた。

中国の経済

260

あの彪大無比なる中国の、しかも私には全く不得手の「共産国の経済」と、その「民生」の実態を解明せんとするには、僅か十六日間の馳け足では到底不可能であり冒険である。が、私は精一ぱい知ろうと懸命の努力を続けてみた。象を知ろうとした群盲のたとえに終るであろうが、ご教示を期待しつつ与えられたテーマに対し敢えて筆をすすめたい。

中国数千年の歴史は、奴隷と封建の、いびつなる一種の資本主義体制に終始したのであるが、毛沢東の共産主義体制の抬頭によって遂に終止符がうたれた。かくして二十八年、この間、劉少奇の修正主義、林彪および四人組の反党等々、現体制の行手を阻んだのであるが、漸く打破しつつ、いまその輪廓がやっと固まりかけた段階であろうか、これからが本番であろう。

私が若し中国に生まれていたら、この共産革命の戦士になっていたであろうと思う。新中国の建設には、これしかなかった筈であり、中国八億の大多数の民族は、この革命によ

って奴隷と封建の搾取から解放されたのであり、いま不十分ではあろうが「働かざるものは喰うべからず」のスローガンのもと「働くものには生活の保証」がなされ、停年退職ともなれば七〇%（？）が支給されているようであり、階層、富めるものと、然らざるものと、差はなく、平等の社会とインフレなき物価安定の中に、大きな不満のない民生の展開となっているのではなからうか。

中国の要人は口を揃えて「中国は発展途上国である……」と、謙虚に率直に、私どもに訴えていたが、産業に経済に、民生に、まさにその通りであるところに、むしろ将来への希望と発展が託せられるのではなからうか。農業についてだけでも、飛行機上から見える大陸、沿道に望見する限り整然と耕地された田畑が広がっているが、それは近代化された農機具によるものではなく、僅かな例外もあるが殆どが、ひと鍬づつ振りあげての人海戦略によるものである。

中国は、奥地、僻地、山系は別として、気候に恵まれた彪大なる平野を抱えて、農業立国を志向するのは当然で「農業を基礎に工業を導く」が国是である。先づ足元の食糧確保が先決であり、漸次国力を培養しつつ工業の発展拡大を策定するものであろう。中国は古来、棉花の産出国であるが、今は適当にその栽培を制限し、食糧との均衡を計っているのであろう。即ち、中国人の一般衣料は綿製品であるが、これだけは、いわゆる切符制で、

261

需要を押さえているのであろう。食、衣、住の序列であろうか。

中国は今「四つの現代化」を強力に願望し、押し進めている。即ち、農業・工業・国防・科学である。私は中国のある要人に「中国が農業の現代化、機械化を拡大したら、八億の七〇％と言われる農業人口に失業者が出るのではないか」と、ぶしつけに愚問を発したところ「その心配は要らぬ、余剰労力は工業に廻さねばならない」との答が即座に返ってきた。私は改めて「農業を基礎に工業を導く」所以を再確認したのである。織物工場、紡績工場をいくつも見学したが、その機械性能は、だいぶん遅れているが、一行の中のある人は「日本の二〇年前……」と、評価していた。

しかし、こうした機械力の格差は人力でカバーしてなお余りあるのではなからうか。八時間の三部制交替の作業で、男女、年令を問わず、深夜をいとわず、しかも低賃金で、求人問題はなく、日本の金の卵も何のその、コスト的には無敵の筈である。

刺繍(ししゅう)の工場や、ビヤクダンの扇子工場では、繊細で複雑極まる作業に耐え忍んで取り組んでいる姿には、いたいたしささえ感じ、中国労務者の、生き抜かんとする意欲には、頭のさがる思いを禁じ得なかった。

油画で描れた毛沢東と華国鋒との快談の情景を見本に、二〇〇号大の刺繍の作品に、四人掛りで一針づつの手仕事で取り組んでいたが、完成には一カ年位かかるとの事であったが、

四人、三〇〇日として一、二〇〇工数で、一つの作品が出来上るのである。もちろん、採算を度外して中国刺繍の技術を海外に誇示しようとするためのものであろうが、繊細で微妙な濃淡など、油の原画そっくりに出来上りつつあって、ただ驚嘆の他はなかった。扇子の彫刻また然り、いづれも外貨を稼せぎ、機械化の及ばぬ他の追隨を許さない中国ならではの技術であり、この他、漆工芸、玉(ぎょく)工芸、絨氈などいづれも手工芸である。

「毛沢東思想萬歳」、「四人組徹底粉碎」などのポスター、垂れ幕、看板などが、街に村に、重要建造物にと、はらんしているが、これらに加えて目立つのは農村に工場に「農業は大寨に学べ」、「工業は大慶に学べ」のスローガンである。「大寨」は、石家荘の近く、山西省東部の昔陽県に在る一寒村であったが、この生産大隊は、毛沢東思想を立派に実践、自力更生の精神を発揮し、模範的な開拓農耕を作りあげたのである。「大寨」は自然環境に恵まれず、右も左も山また山の石ころの荒地であったが、立派な段々畑を完成し、併せて工業を興し、診療所、学校、託児所、商店などを完備した理想郷の建設に成功し、年間数万の内外人が見学に訪れるまでになったのである。「大寨」の不屈の精神と、見事なる実践と成果を、全中国の農山村に拡大せんとするのが願望である。

もう一つの「工業は大慶に学べ」の「大慶」は、ハルピンの西北に在り「大慶油田」で有名である。一九五九年、中ソ関係が悪化し、ソ連からの経済援助が全面的に打ち切られた